2020年2月9日青戸教会説教『本当の自由とは』

ヨブ記22章11〜28節、ヨハネ福音書8章21〜36節

国立国会図書館の目録ホールには「真理はあなたがたを自由にする」という記銘がギリシア語で書かれています。本日のテキスト8章32節の『真理はあなたがたを自由にする』のギリシア語がそのまま用いられているのです。戦前の軍国主義の反省に立って、人間が知識や情報を自由に獲得し、何ものにも束縛されないで自律的に思考することが人間を人間たらしめる上で最も重要なことだという認識が、この言葉が記された背景にはあります。敗戦間もない時期に参議院図書館運営委員長だった歴史学者の羽仁五郎氏がドイツ留学中にフライブルク大学の赤煉瓦の講堂に記されていたヨハネ福音書のこの言葉を覚えていて、それを用いたものです。この言葉は国立国会図書館だけでなく、首都大学や琉球大学などの公立大学図書館をはじめ、専修大学、神戸女学院大学、明治学院大学、沖縄キリスト教学院などの私立大学の図書館にも記銘されています。記銘文字は新約聖書そのままのギリシア語であったり、ラテン語であったりしますが、内容は同じです。さて、私は、この言葉の「真理」(アレーテア)には見えざるルビがふられていると考えています。それはイエス・キリストです。真理Ⅱイエス・キリストが私たちを自由へと解放する¹ 1
るとというのが、ヨハネ福音書記者が本当に伝えたかったことだからです。

イエス・キリストの福音が私たちを自由へと解放するということは「福音がもたらす救い」のことを「自由」と呼んでいるのです。ただ、ギリシア語の本来の意味で言えば、自由とは誰にも拘束されない状態のことです。誰にも隷属しないで、自分が自分の主人であることが自由だと考えます。確かに自由意志に基づいて自由な行動ができなければ人間の尊厳を保証することはできません。また、真理を追究し表現することができる自由も保証されていなければなりません。しかし、歴史的にはこの真理と自由はその時代時代の為政者によって悪用されてきました。言葉とは裏腹に人間から真理と自由を奪ってきました。真理であるイエス・キリストを排除し、人間から自由を奪ってきたのです。

私は2007年3月にポーランドのオシフィエンチム(古都クラクフから西へ約50キロ)という町を訪れました。目的はアウシュヴィッツ収容所を訪問することでした。その第一収容所の入り口にはドイツ語でアルバイト・マハト・フライ(直訳は「労働は自由を作る」という言葉が掲げられています。今年のアウシュヴィッツの解放から75年を記念する式典が執り行われました。しかし、掲げられた『労働は自由を作る』という標語とは裏腹に、現実には強制収容所で働くことは自由を得ることなく、死を招くもの

でした。1940年6月14日に人口45000人の町オシフィエンチムが勝手にドイツ語名のアウシュヴィッツに変えられ、強制収容所が建設されました。1945年1月27日までの約4年半の間、この収容所は存在しました。ここに移送されてきた人は130万人と推定されています。そのうち奇跡的に生き残ったのは10%程度です。アウシュヴィッツに連れてこられたユダヤ人は、ポーランドから30万人、ハンガリーから43万人、フランスやオランダから7万人、ギリシアから5万人が列車で連行されてきました。そのうちユダヤ人ら120万人が殺害されました。いまそのアウシュヴィッツ強制収容所跡が「ポーランド国立アウシュヴィッツ博物館」になっていて、歴史の暗黒面を想起する場所となっています。

1942年1月にナチス・ドイツの高官がベルリン郊外のヴァンゼーに集まり、「ユダヤ人問題の最終解決」（『絶滅計画』）が決定されました。最終解決とはユダヤ人を絶滅させることです。それから欧州各地のドイツ軍占領地域からいくつもの強制収容所に貨物列車で連日送られてくるようになったのです。特にアウシュヴィッツ収容所は絶滅収容所として、ユダヤ人殺害の機能を果たしたところです。この第一収容所の入口の「アルバイト マハト フライ」労働は自由を作る」と書かれたゲートの向こう側に赤レンガの大きな収容棟が28棟とポプラ並木が続いています。この2階建て赤レンガの収容所群の周りは高圧電流を流した有刺鉄線で囲まれていました。この種の記念施設には必ず墓石があるものですが、アウシュヴィッツ収容所にはどこにも墓石はありません。でも多数の人間が命を失ったことから、そこは「墓石のない墓地」と言うことができます。この28棟には最大時で2万人が収容されて、そこからナチス傘下の工場へ軍事産業の労働に駆り出されたのですが、その建設現場や工場で短期間に人が命を落としていったのです。

私は4号館から見学していきました。その入口には「歴史を記憶しない者は、再び同じ味を味わわざるをえない」というメッセージが掲げられていました。アウシュヴィッツにはユダヤ人だけでなく、ポーランド人の政治犯も収容されました。さらにはロシア人の戦争捕虜、ロマ（ジプシーというのは差別語）に加えて、知的・身体障害者、同性愛者、エホバの証人（ドイツ人でもその対象となります）も犠牲になったのです。連行されてきた犠牲者たちの写真が建物の壁に展示されています。4号館の展示室にはガス室と焼却炉の模型がありました。5号館は略奪没収品であるメガネ、義肢・義足、靴、旅行鞆、髪の毛が展示されています。天上高く積み重ねられているそのボリュームの多さを見るだけで衝撃を受けます。廊下に展示されている顔写真の残っている犠牲者は初期には政治犯が多く、後に大量に輸送されてくるユダヤ人は撮影自体がなされていません。

顔写真の下には囚人番号、名前、生年月日、職業、そして収容日と死亡日が書いてあるのですが、ガイドに「どれくらい生きてください」と言われたので、見てみると大体の人が3カ月程度でした。アウシュヴィッツに来て多くの人間が3カ月で死んでいくのです。最初から労働力として期待できないと判断された人は列車を降りたところで、ガス室行きが決定されます。先ほどの煉瓦造りの収容棟は労働力として軍事産業に従事する人たちが収容されていました。それとは別にバラック造りの収容棟がたくさんあって、今はその暖炉跡だけが残っています。

カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した映画「サウルの息子」(2015年)を見たことがあります。内容は、特命労働隊(ゾンダー・コマンド)の一人であったユダヤ人サウルという人物が、自分の息子がガス室で瀕死の状態ながら、まだ生きているのを目撃します。サウルはどうすることもできません。息子は彼の目の前でナチスの軍医にすぐ殺害されます。しかし、ここからサウルは異常とも思える執念で、検死室に安置された息子の遺体をどうにかしてユダヤ教式の埋葬をしてやろうと奔走するのです。

ゾンダー・コマンドというのは、ガス室をシャワー室だと偽って同胞のユダヤ人を案内し、殺害された後は死体を焼却炉で焼き、灰を近くの川に捨てる作業に従事したユダヤ人たちのことです。彼らは食事を与えられる特別待遇を受けますが、それは生き残るための究極の選択です。この人間の尊厳が根絶や³しにされた仕事をユダヤ人だけにさせるのは、第一には大量殺人の秘密を外に漏らさないためでした。それを徹底するために彼らゾンダー・コマンドたちは4カ月ごとに殺され、アウシュヴィッツに送られてきたユダヤ人の中からまた欠員を補充する体制が作り上げられていたのです。

なぜこのようなナチズムが台頭したのか。20世紀の最大の哲学者ハイデッガーは1927年に思想書「存在と時間」でヨーロッパ哲学界に躍り出て、1928年に自分自身の師であるフッサールの後任としてフライブルク大学の哲学部の教授になりました。時代はナチスが政権を握った1933年です。ハイデッガーはその年の5月27日、「ドイツの大学の自己主張」と題して学長就任講演をします。そこで彼は、大学はドイツ民族の命運のために奉仕すべきであって、大学生は労働と国防と知識でナチス国家に奉仕すべきと語ったのです。そして、大学の自由の廃棄を説き、労働と国防と知識という3つの奉仕のための規範を与えることこそが最高の自由だと言明したのです。

それまでの彼は1930年に「真理の本質について」という本の中で、自由が真理の本質であると主張していたのです。にもかかわらず、そのようなハイデッガーがいつも簡単に真理と自由を捨ててしまうところに人間の罪と弱さ、時代の子としての制約があるのです。

これに対して、1932年7月にベルリン大学の若き教授で神学者のボンヘッファーは次のように自由について書いています。『われわれの虚偽は神に対する虚偽である。それは、神の現実と真理に抵抗し、神の交わりの意志と恵みに逆らい、神の愛に反抗する。∴虚偽のうちに生きる者は、憎悪に生きる。言い換えれば、その人は自己自身の枷（かせ）につながれて生きており、桎梏につながれており、自己自身の下僕となっている。だが、このことを認識するのが、神の真理の認識の初めであり、神のみの与え給う認識である』。ここで彼は『神の愛に反抗する（者は）、自分自身の枷（かせ）につながれて生きており、自己自身の下僕となっている』と言っています。現代の私たちは自分の主体性を発揮できることが自由だと考えていますが、それは自分自身の奴隷になると警告しているのです。自己決定権が自由の元だと考えている。更に彼は『虚偽と不安と憎悪の奴隷としての自己を認識する者は、すでに神によって真理のうちに置かれている。∴自由になるということは、この世で偉大になる、兄弟に対して自由になる、神に対して自由になるということではない』と語っています。この指摘は人間存在の自由と真理について根源的で本質的なことです。ボンヘッファーはヒットラー暗殺計画に参画した神学者ですが、その彼が自由について本質的なことをここで指摘しています。

自由とは非人間的な束縛や奴隷状態から解放されることだと多くの人は考えます。そのために他者 4 を自分の自由を制約したり疎外する存在と受け止めがちです。しかし、ボンヘッファーは兄弟や神から自由になることが人間存在の本質的な事柄ではないと指摘しているのです。私たちは自分の自由意志を阻害するものを「他者」や「敵」と認識します。自分の思い通りにならないことを「苦難」「苦しみ」「試練」と見なします。端的に言うならば、私たちは自分が制御できないものから自由になることを望みますが、逆にそういうものから完全に自由になったとしたら、そこでは私たちは自分しか出会わないことになりません。けれども、自分が自分の人生の主人公であるということは、自分が自分の奴隷であることにほかなりません。もし仮に、世界が自分にとって完全に制御可能な対象であるならば、それは自分を世界全体へと拡張させただけです。そこではすべては自分の意のままになるかもしれませんが、逆に自分を失ってしまうでしょう。人間に制御不可能な他者があり、思う通りにならない人生があるからこそ、私たちは世界や他者を認識できるし、生をいとおしいものとして受け止めることができるのです。

もし、生きていく中で自分にしか出会わないとしたら、つまり世界や他者が自分の思う通りになるならば、生きている世界は退屈極まりなく、生きる意味も必ず見失います。ボンヘッファーが、自由を求めることが実は自己自身の枷につながれて生きてしまうことになる危険性を指摘した上で、この人間存在の所

与的な限界性を認識することが神の真理の認識の初めとなるという指摘は非常に大切なことです。

ここでの真理とは、神との正しい関係性に入ることです。神の意志を求めつつ、それに服従していくことで、自分自身の枷から解き放たれ、人間が人間たらしめられるのです。私たちの善なるものを希求する思いをいつも逆転させ、私たちに虚偽や不安、憎悪を生じさせ、しかもその罪を他者に責任転嫁しようとすることから自由になるために、主イエスが私たちと共に生きてくださったっているのです。

さて、この映画ではゾンダー・コマンドたちの反乱計画が同時並行で描かれています。主人公のサウルは息子の遺体をユダヤ教の正式な方法で埋葬することに躍起になります。しかし、映画の中では「お前には息子がいないだろう」と仲間にも忠告されます。だから、馬鹿なことをするなと何度も忠告されます。おそらくサウルには息子はいないのです。それは事実です。サウルが自分の息子でない少年の遺体を丁寧に葬ろうとするのは、同胞をだましながらガス室に送ることで自分の存在基盤を失っていったからです。自分の命をわずかに延命するために多くの命を犠牲にすることは、自分の自由を一時確保することになったとしても、実は自分が生きる上での真理を失わせる行為だったことが象徴的にえがかれているのです。だから、サウルは存在しない息子のために命を投げ出すのです。

本日のテキストの最初の21節で、イエスはユダヤ人たちに『わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう』と語ります。これはイエスを肉体的に目に見えるかたちで探すだけでなく、イエスの存在が自分たち信仰者にとってどんな意味をもっているかを語った言葉です。ところが、『あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる』(21節)とも語りました。ここにはイエスという真理が自分にとってどういう存在であるか、根本的な生の意味を探し求めることが人間には不可欠であることが示されています。しかし、人間は「自分の罪に死ぬ」とあるように、自由を求めて真理そのものであるイエス・キリストを信じない存在になって行くのです。しかし、『わたしの言葉にとどまる』(31節)ならば、イエスを信じる者は自由を得るといえるのです。37節でもイエスは私の言葉を受け入れるならば自由を得るといいます。「受け入れる」(クオーレオー)とは「根を下ろす」ことです。あるもののために場所を空けて譲ることを意味します。つまり、イエスを自分の中に受け入れる場所を用意しておくことが、自由をもたらすのです。イエス・キリストという真理が最上位の価値基準になるから、自分もその他のものすべてが相対化されるのです。相対化されることで、互いに愛し合いなさいというイエスの愛の戒めが自分の思いと行動に無理なく立ち現われるようになるのです。そのような信仰者になることが本当の自由を得ることにつながるのです。